

初期施釉陶器の文様と産地

—飛鳥地域出土の2例について—

はじめに 日本での鉛釉使用は、大阪河南町塚廻古墳の陶棺台、川原寺水波文磚など建築材に始まり、8世紀初頭以前の日本出土施釉陶器（硯と同蓋、印花文長頸壺、盤口壺、碗、高杯など）の多くは百済・新羅・中国からの搬入品とされる。それらの形態・技法の淵源が、百済・新羅・南北朝～隋唐の中国にあることは確かであるが、「類似」は産地決定の充分条件ではなく、釉薬の成分分析も、鉛釉の場合はガラス塊としての搬入が考えられることから即断は難しい。当該期の日本の施釉技術の評価をめぐって、高橋照彦は、それらが朝鮮半島産あるいは朝鮮半島系の技術系譜にあり、「奈良三彩」は再開遣唐使がもたらした唐三彩の技術・知識によっているとして、「日本製の存在」と「技術的には三彩製造が可能な段階に達していた」とする考えには否定的である（高橋2006）。ここでは、飛鳥地域出土例のうち、藤原京六条三坊出土の緑釉獸脚硯、飛鳥池遺跡出土の鉛釉土製品付壺の2例を素材に文様と産地の関係を検討したい。

緑釉獸脚硯 藤原京六条三坊の獸脚硯は、藤原京造営時に掘削され奈良時代中頃まで機能した東西溝SD4130から出土したもので、半球形の脚頭部と蓮弁文の脚裾部をもつ脚を11本貼り付け、硯部外側面に忍冬唐草文のヘラ描き文様を描く。全面に緑釉がかかることから、施釉陶器生産が先行する朝鮮半島産の可能性の高いものとされ、扶余錦城山出土例など扶余地方出土硯と比較した千田剛道は「百済産」とした（千田1995）。筆者は、後述のように、硯部側面のヘラ描き文様を根拠に日本製と考えてきたが、釉薬に含まれる鉛が朝鮮半島産鉛の領域に含まれることもあって、必ずしも優勢ではない。

百済の硯を検討した山本孝文は、当該硯と同様に、脚部に蓮弁状の文様を陽刻（型作り）した獸脚硯をI b型式とし、中国四川省青羊宮窯出土の青磁獸脚硯をモデルに、百済で作られ、脚部背面に多量の補強粘土を追加する変更を加えたとし、7世紀初～百済滅亡の660年頃の間、丸みのある蓮弁文から直線文（後述する交互配置の山形三角文と同じ）表現へ型式変化したとする。そして、同型式に属す石神遺跡出土の非施釉の獸脚硯については、I b型式の百済における変容過程で「導入」された

とするが、丸みのある蓮弁文が明確な当該硯についてはI b型式の初期の段階にあり、中国唐産の可能性を残しつつ百済産とみているようである。

百済・畿内・筑紫の獸脚硯を詳細に検討した白井克也は、硯部外縁（白井：緑台）を4式、脚を5類に分類し、その組み合わせによる7組について、百済出土例のあるものは百済製、ないものは日本製とし、当該硯については、同じ緑台3式脚e類に属す百済出土例に鉛釉製品があることから百済製と明快に断定する。いっぽう、緑台1式脚a類の石神遺跡の獸脚硯は畿内産と考えている。白井の緑台の4式とは、海部底と外縁上面および脚上端の高さ関係による区分であり、そこに製作技法の相違を認識するもので、脚の5類とは脚頭部の形状とその高さ、周辺部の調整法の違いによる区分と理解される。問題は、脚a類の蓮華文・幾何学文を「押捺文」とし、脚e類を幅広い圈足に貼花文としての薄い脚部を貼り付けたのち周りを切り抜く「貼花文・切り抜き」とした技法復原にある。獸脚硯の獸脚（d類水滴形を含む）と脚を輪台で繋いだ蹄脚硯の脚柱部はいずれも唐三彩の三足炉などにもみられる「型抜き」成形である。にも関わらず脚a類を「押捺文」、脚e類を「貼花・切り抜き」として製作法の決定的な相違と絡めている。そもそも、獸脚硯は脚部の接点に脆弱性があり、また、多足化した故の「使用時のがたつき」の恐れがある。倒置しての脚貼り付けには、脚の形状と貼付け位置の統一のためにも「型抜き」が必要で、型をあてたまま背面から粘土補強するのである。

すなわち、白井の脚a類と脚e類にはともに蓮弁文があり、節の部分がかたまる側面形をなす。相違点は脚頭部の形状が円柱状か半球形かにあり、脚d類（水滴形）を含めた脚頭部の形状に「系統」の違い、周縁部の調整法の違いに「産地」の違いを認識するとして、それだけで当該硯を百済製、石神遺跡の獸脚硯を畿内製と断定することはできない。むしろ、百済出土例のないものを日本製と断じる立場からすれば、当該硯と百済出土硯との最大の相違点、硯部側面の忍冬唐草文ヘラ描きの存在は日本製を主張するが、白井は全く触れていない。

当該硯の忍冬文を法隆寺献納宝物金銅小幡の坪縁を囲む忍冬文と対比すると、脚頭間には、細長い主弁と内側3、外側1の丸い小弁とからなる右行する5弁の忍冬文と脚頭にかかる2本の平行線として未完の茎を描き、半

球形の脚頭部は結節点の萼に、脚裾部の蓮弁は結節点からのびる蕾に見立てていると理解できる。ヘラ描きとしての崩れた表現は、藤原宮式軒平瓦6647型式に通じ、文様構成を十分理解した手慣れたものである。新羅独自の文様は「印花文」であり、百済にも中国にも、唐草文をヘラ描きしたものはない。いっぽう、藤原宮・京、平城宮・京からは葡萄唐草文をヘラ描きした金属器模倣形態の須恵器蓋・杯L・壺体部が出土しており、ヘラ描き文を施したものは日本製とみるべきなのである。

鉛釉土製品付壺 飛鳥池遺跡の鉛釉壺は、釉薬の熔融が不十分のままに廃棄された失敗品であることから飛鳥池遺跡内の日本製であることはあきらかである。口頸部を欠くが扁平な体部と低い高台のついた平らな底部は中国南北朝の金属製唾壺に類似し、体部中位には2条一組の直線文で区画した「交互配置の山形三角文」の文様帯を、体部下半に「複合鋸歯文」の文様帯を巡らせ、壺にともなう蓋の頂部外周にも「交互配置の山形三角文」帯がみられる。この壺の最大の特異点は、肩部に楕円球形と長方形盾形の付属土製品をそれぞれ6個貼り付けていることにあり、長方形盾形土製品の正面と側面には、高松塚古墳東壁壁画の青龍の頸部に描かれた文様と酷似した「対向山形三角文」、楕円球形土製品の全周には「交互配置の山形三角文」のヘラ描きをもつ。

この文様については、高松塚古墳の壁画発見直後から、渡辺明義、町田章、網干善教らが壁画図像の淵源を探るなかで、南北朝・隋・唐、高句麗の壁画や石刻画、画像石に描かれた龍と朱雀(鳳凰)の頸部に見出し、「画文帯(渡辺)」「横縞・斜十字と鋸歯文をいれた帯(町田)」、「頸部装飾(網干)」の名で呼び、背後に火炎文、宝珠文をとともなうことにも注意している。詳述の余裕はないが、網干らの集成検討およびその後公表された図像を含めて、紀年が比較的あきらかなものを検討すると、南北朝末～隋初には南朝・北朝を問わず、2～3条の横線で両端を区切った中を斜格子文で埋める帯状の表現(網干の第2類型)がみられ、高句麗には別に横線だけの表現もある。7世紀後半には斜格子文を四辺から中央で対向する山形三角文(網干の第1類型)に変えたものが現れ、7世紀末～8世紀初めには「多重の対向山形三角文」や「中央を複線あるいは単線の×文に簡略化した対向山形三角文」、8世紀中頃には×文のみのものが出現し、描かれる対象

も白虎・玄武に拡大してゆく。高松塚古墳および土製品の文様は7世紀後半～8世紀初めの表現にあたるものであるが、隋～初唐とされる中国の獸脚硯(広西壮族自治区桂川窯、白井2000図4-40)の細棒状脚下端にもあり、成立はより古くに遡るとみられる。龍の頸部背後の「火焰形」も隋代には玉葱形の「火焰宝珠」で、蓮華座をとともなう蕾状表現や「博山形」との通用がみられる。楕円球形土製品の形状はまさにこの蕾・博山にあたるものであり、日本製の鉛釉壺には南北朝末～初唐段階の文様(知見)が集積され、ヘラ描きされている。獸脚硯との関連からは、獸脚硯の水滴形脚とは「玉葱形の宝珠」であり、陽刻蓮弁文とは細長い円柱状の脚頭部を龍の頸部、半球形の頭部を宝珠に見立てたもので、山本のいう蓮弁文から直線文(対向山形三角文)への型式変化とは、表現対象を異にした系統の相違と考えるべきであろう。

おわりに 緑釉獸脚硯は、南北朝末期の中国に系譜を持つ百済の獸脚硯に独自にヘラ描き文様を加えた日本製で、鉛釉土製品付壺には隋～初唐段階には成立していた文様がヘラ描きされる。7世紀末～8世紀初めの日本には唐三彩に通じる技術を含む施釉陶器製作の素地は存在し、直接の技術系譜である朝鮮半島とも異なるものを指向しているのである。なお、高橋が唐三彩との技術差とした「鉛丹」は、遅くとも天武朝には伝来・実用していた「本草集注」所載の石薬であり、その製法を知らないはずがない。殊更に唐三彩との技術差を探し求めて、再開遣唐使の帰国情報に帰するよりも、奈良三彩もまた唐・新羅と対峙する中ですすめられた日本の律令制国家形成期の独自性とするべきである。(西口壽生/客員研究員)

参考文献

- 千田剛道「獸脚硯にみる百済・新羅と日本」『文化財論叢Ⅱ』同朋社、1995。
- 白井克也「東京国立博物館保管青磁獸脚硯」『MUSEUM』538、2000。
- 山本孝文「百済泗泚期の陶硯」忠南大学校百済研究所『百済研究』38、2003。(川越俊一・朴宜映氏の教示を得た。)
- 白井克也「筑紫出土の獸脚硯」『九州考古学』79、2004。
- 渡辺明義ほか編『日本の美術No.217高松塚古墳』至文堂、1984。
- 町田章『古代東アジアの装飾墓』同朋舎、1987。
- 網干善教「四神図の頸部装飾とその類型」『関西大学博物館紀要』4、1998。
- 高橋照彦「白鳳緑釉と奈良三彩」『陶磁器の社会史』桂書房、2006。